HOT! NEWS ①

フランス共和国エリート養成機関、エコール・ポリテクニーク来校

2018年10月29日、エコール・ポリテクニークの柔道チームが2年ぶりに来校。柔道の合同練習をはじめ、トヨタ自動車工場見学など本校生徒と国際交流を行いました。

▲歓迎セレモニーにて校長より挨拶

エコール・ポリテクニーク（通称：L'X）は、1794年フランス大革命の時代にラザール・カルノー、ガスパール・モンジュ等の著名な数学者によって設立され、ナポレオン帝政のもとで大きく発展したグランゼコール（高等教育機関）です。同校を日本の教育制度に当てはめると、理工科系大学並びに大学院に相当し、単純に日本の大学に例えると、アカデミック面では東京大学、組織の規模は東京工業大学、そして制度面では防衛大学校の特徴を合わせたユニークな教育機関と言えます。長い歴史と伝統から、同校の卒業生はPolytechnicienと呼ばれ、その多くがグローバルリーダーとしての実績を重ねています。著名な卒業生としては、ジスカール・デスタン元仏大統領、産業界ではフランスのルノーを経て、日産自動車の社長兼CEOとなったカルロス・ゴーン氏がおり、その他各界に多数のPolytechnicienを輩出しています。

10月29日の午前は、本校生徒15名とともにエコール・ポリテクニーク学生30名がトヨタ自動車の元町工場およびトヨタ会館を訪問しました。愛知が世界に誇るトヨタ自動車の75年の歴史や環境負荷を考えた水素を燃料とした燃料電池自動車MIRAI、PHVをはじめ、ハイブリッド技術をコアとしたエコカー開発への多面的な取り組みを学びました。また、同日の午後には、本校アトリウムにて吹奏楽部によるフランス国歌の演奏を含む歓迎セレモニーを開催。その後、格技場にてエコール・ポリテクニーク学生および国際生など計約60名で国際交流の一環として柔道の稽古を実施し、両校学生ともに意義深い1日を過ごしました。

エコール・ポリテクニークでは、実技教育として早くから柔道を採用。特に同校3年次の柔道学生は柔道の本場である日本へ団体で柔道研修旅行を実施（隔年）しており、日本国内の提携大学である慶應義塾大学および東京大学と交流を行っています。名古屋国際中学校・高等学校は、中等教育機関としては日本国内で初めて2014年に第1回、2016年に第2回、今回の第3回目の交流を行い、本校の国際生にとっても貴重な機会となっています。

▲本校体育館にある格技場で柔道交流の様子

▲トヨタ自動車元町工場にてエコール・ポリテクニークの学生と本校生徒で記念撮影

Feature

King's College Wimbledon 国際交流Report

中高一貫3年生のロンドン国際理解研修における、新たなプログラムとして実施された「King's College Wimbledon」での交流活動。参加生徒たちの言葉をもとに、その内容と魅力を紹介します。

▲キャンパスツアーでは、教員1名と在校生2名がガイドを務めてくれました。日本とはまったく異なる施設・環境に驚かされながらも、生徒たちは英語での説明に、熱心に耳を傾けていました

King's College Wimbledon（キングス・カレッジ・ウィンブルドン）とは

▲歴史と伝統を感じさせる荘厳な雰囲気を携えるキャンパス

ロンドン・ウィンブルドン地区にキャンパスを構えるパブリックスクール。王室認可のもと1829年に設立された伝統校で、7歳～18歳の男子と16歳～18歳の女子を合わせて1,300名超の生徒が学んでいる。国際バカロレア・ディプロマプログラムを実践し、「全6教科で満点を獲ること」を目標に掲げ、毎年、認定スコア45（満点）を獲得する生徒を複数輩出している世界屈指のエリート校でもある。

豊かな自然が残るキャンパスでIBスクールの"仲間"たちと交流

厳しい暑さが続いた9月。今年度も中高一貫3年生がロンドン国際理解研修に臨み、実践的な英語学習と異文化体験を経て、無事に帰国しました。今回は初めての試みとして、12名の生徒がロンドンにあるパブリックスクール「King's College Wimbledon（KCW）」を訪問。本校と同じ「国際バカロレア・ディプロマプログラム」を実践する名門校で、校内を散策しながら教師や生徒との交流を楽しみました。

「海外の学校の雰囲気を体感したい」「英語コミュニケーションの課題を見つけたい」。参加理由はさまざまですが、12名の共通点は好奇心旺盛で、英語コミュニケーションに高い関心を持っていたこと。研修2日目に行われた訪問では、ホテルから地下鉄に乗って最寄り駅まで移動。「テニスの全英オープンが開催される『オールイングランド・ローンテニス・アンド・クローケー・クラブ』を見ながら、徒歩でKCWに向かう途中にも、街を歩く現地の人たちに積極的に英語で話しかけていました」と引率同行した黒宮祥男先生は振り返ります。

エントランスゲートでKCWの教師・生徒と対面した12名は、学生食堂でランチをとった後、"キャンパスツアー"に参加。当日は新学期初日ということもあり、授業を見学することはできませんでしたが、英語による説明に熱心に耳を傾けながら、広いキャンパスをゆっくりと巡りました。「美術の授業に使われる3階建てのアートルーム（美術室）など、施設のスケール感に圧倒されました。3Dプリンターを使った授業もあるようで、大小いろいろな作品が展示されていてとても興味深かったです」と思い出を語ってくれたのは木村虎大朗君。本校で「IB-Skills」の数学を担当するマシュー・クレイマー先生によれば、KCWは「非常に"豊か"な学校」とのこと。想像を超える恵まれた環境に、生徒たちが目を丸くする場面も少なくなかったそうです。一方、古賀雄大君が感動したのは景色の美しさ。「人工的なものが少なく、自然が豊かで、学校の伝統や歴史を感じました。屋外で卓球やバスケットボールをしたり、図書館で本を読んで過ごしたり、生徒たちが興味あることを自由に楽しんでいる様子が印象に残っています」と笑顔を見せた古賀君。「教員専用のカフェテリアのソファで、先生が靴を脱いでくつろいでいたり、日本と違う"おおらかさ"を感じました」という伊藤衣音さん、「アフリカ系やアジア系など、生徒たちのルーツも多様で、同じ年齢でも大人びた印象を受けました」という廣瀬心音さんなど、生徒はそれぞれの視点で日本との違いを実感したようです。

▲ビュッフェ形式の学生食堂でランチを堪能

▲時間が経過するにつれて笑顔も増えました

主体的に交流する姿勢があれば言葉の壁は乗り越えられる

ガイドを務めてくれたKCWの高校生との会話を通じて、生徒たちはイギリスの人が日本文化に興味を持っていることも知りました。「図書館に日本の"マンガ"が置かれていて、ランチタイムには日本食の話題で盛り上がりました」と笑顔を見せた4人。言語や習慣の壁を超えて日本の文化が理解され、受け入れられていることへの"喜び"や"誇らしさ"も、生徒たちの積極性を後押ししたようで、クレイマー先生は「日本語と英語を織りまぜながら、非常にインタラクティブに交流していました」と生徒たちの姿勢を高く評価します。交流を終えホテルに戻る際には、地下鉄の駅入口が閉鎖されるというハプニングに遭遇しましたが、徒歩で隣駅まで移動する途中にも、地元警官に話しかけ記念撮影に成功。旺盛な"交流力"は最後まで衰えることがありませんでした。

貴重な体験を経て、生徒たちの心にはさまざまな変化が芽生えているようです。「たくさんの人とふれあい、文化の違いを自分の目で確かめることができました。特に2日目のKCW訪問は、英語でコミュニケートする場面が多く、『もっと英語で会話したい』『海外でいろいろな体験をしたい』という思いが強くなりました」と目を輝かせる伊藤さん。また、廣瀬さんは意外な視点から、英語学習へのモチベーションを高めたようです。「帰国する飛行機の中で、たくさんの日本人乗客がいることに気づき、『これほど数多くの人たちが実際にグローバルな活躍をしているんだ』とあらためて実感しました。自分の課題を理解することもできたので、これからも貪欲に学び続けて、いつか留学という目標を実現したいです」と廣瀬さん。また、「IB-Skills」を受講している古賀君と木村君も、「一週間では物足りないと感じるほど充実した体験となり、教科書で学ぶ英語と実際に使われている英語の違いを知ることができたので、これからも世界を飛び回りたい」（古賀君）、「次はアメリカやアジアで現地の文化を学んで、違いを比較することで世界との関わり方を考えられるようになりたい」（木村君）と、それぞれに変化を口にします。

「考え方や文化の違いなど、ロンドンで経験したことは、きっと今後の生徒たちの心を形成する核になるはず。これからも世界への冒険を続けてほしいですね」とクレイマー先生。黒宮先生も「自ら主体的に交流しようとする姿勢があれば、言葉の壁は越えられます。来年度はより多くの生徒が参加できるよう、"交流力"を磨く機会を増やしていきたい」と語るように、KCW訪問のさらなる内容拡充に期待が膨らみます。

▲左から／古賀雄大君、木村虎大朗君、伊藤衣音さん、廣瀬心音さん（いずれも中高一貫コース3年生）。引率同行した黒宮祥男先生（後左）、Matthew Kramer先生（後右）と現地での体験を笑顔で振り返ってくれました

THE FRONTIER TIMES

Report ①

第5回ESD日本ユース・コンファレンス「教育でより良い未来をつくる」参加者が本校に来校されました！

SIA特論の視察と本校生徒達とのワークショップによる交流が行われました。

▲ワークショップ後にユース・コンファレンスの参加者と本校生徒で記念撮影

▲生徒も交じってワークショップに参加

▲Kokusai Friend Coffeeを提供中

大学生、教員、NPO/NGO関係者、環境省/文部科学省などESDに関わる25名の方々が来校されました。10月13日から14日まで第5回ESD日本ユース・コンファレンス「教育でより良い未来をつくる」が名古屋市で開催され、そのサイドイベントとしてコンファレンス参加者による本校への視察が実現したものです。ESDとは、「持続可能な開発のための教育」のことで現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。本校では、"多文化共生と減災""経済活動と貧困""社会生活と循環"の3つの社会課題に関する授業や校外学習、課外活動を実践していきました。そうした取り組みの特殊性や組織の運営方法、地域との連携法が評価され、このような機会となりました。今回の訪問では、SGHアソシエイト・サステイナブルスクール活動や学校設定科目「SIA特論」の視察、参加者と本校生徒達とのワークショップによる交流を中心に行われました。まず、前半では本校教員からの活動内容を紹介、質疑応答が行われました。来校者の方々の興味を引いたのは、柔軟性という点でした。SIA特論やKokusai Friend Coffee、Sus-Teen!、報告会や研修会への参加など生徒と教員が自ら考案し、実践できている柔軟性に驚かれていました。後半では、2つのワークショップが開かれました。Think the Earthの松本麻美氏のワークショップでは、SIA特論を受講している19名の高校生が参加し、授業でも使用している教材について議論しました。その教材は、Think the Earthの製作によるもので、本校にも多く寄贈していただきました。ワークショップでは、製作に関する思いや困難だったことなどの話があり、生徒たちにとって、「思いを形にする手法」や「何かを作り上げる熱意」を学ぶよい機会になりました。

次に、日本環境教育フォーラムの加藤超大氏のワークショップでは、20名の中学生が参加しました。加藤氏は、青年海外協力隊にも参加されており、さまざまな国での体験について講話をされました。現地の写真を用いたプレゼンテーションでは、体験した人でないと分からない思いを感じることができ、生徒たちには世界の多様性に触れる大切さを感じてくれたと思います。ワークショップ終了後、来校者と本校教員と生徒が自由に交流をする時間があり、Sus-Teen!の生徒と交流した来校者は、自分の地域にもSus-Teen!の支部を作りたいと今後の交流への意欲を話してくださいました。

こうした異なった業種、異なった年代、異なった思いが交錯する場により、名古屋国際中学校・高等学校の活動の多様化が進むのではないかと期待しています。